



2023 年

2 月 第 1・2 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 2 月 5 日 : ヨハネ福音書 12 : 20 - 26 .

『 一粒の麦 』

・ 2 月 12 日 : ヨハネ福音書 3 : 16 - 21 .

『 真理の光 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至る。

ヨハネ福音書 12 章 24 節以下の言葉には、イエス自身と、その後にくる殉教者たちの運命が明示されます。この世の命が否定されても、永遠の命が保証されます。ここで、人知を超えた神の真理が語られます。

今は冬、暦ではキリストの降誕節ですが、一粒の麦の話は、紀元 29 年、乃至は 30 年の春の受難週の始まりの日にイエスが語った言葉でした。

時が経ち、紀元 1597 年の今日、2 月 5 日（陰暦：慶長 1 年 12 月）、西日本一帯から集められたキリスト教徒（キリシタン）26 人が、長崎の西坂で殉教の死を遂げます。現地の長崎の出身者は 13 歳の少年だけでしたが、その他の日本人は東海地方や関西、四国から、さらに外国出身の修道士（スペイン人、ポルトガル人、メキシコ人）らが、これに加わりしました。棄教すれば即時解放という条件で、長崎までの遠い道のりを、見せしめのための行進が東から西へと決行されたのです。それぞれが麦の粒として地に落ちて死んで、多くの実を結ぶために。

事件が起きたのは、西洋の宗教改革が進み西方教会の分裂がほぼ決定的となった 16 世紀の終り頃のことでした。にもかかわらず、これらの東洋の殉教者の命日（記念日）は、ヨーロッパではカトリック教会ばかりでなく、プロテスタントの教会でも覚えられ教会暦に明記されたのでした。

日本の（カトリック）教会は、その後、長い隠れキリシタンの時代を経て明治時代に入り、一度は信教の自由を獲得し、プロテスタント教会や東方正教会と共に国内に広まりますが、その後、日本と欧米との深刻な対立が進むにつれて再び国家からの弾圧を受けてしまいます。

21 世紀に入った今でも、世間にはまだ一部、キリスト教会に対する偏見が残っていることは否定できません。「多くの実を結んだ」西洋の世界とは異なり、「麦」が発芽するための地味が肥沃ではなかったのでしょうか。ただ、日本では多くの書店で聖書が販売されており、読者も多くいることは間違いありません。形を変えた「隠れ聖書愛読者」の時代が来てしまったのでしょうか。

あと数年後（紀元2029 or 2030年）に、イエス・キリストの受難と復活から2000年の時を迎えます。世界のキリスト教会が、西も東も共に、この記念すべき時を平和に迎えるためには、神と人、人と人との緊密な協力は避けて通れないこととなるでしょう。

《 真理の光 》

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

ヨハネ福音書3章16節の言葉は、多くの人々に愛され、多くの人々が救われた言葉です。ここでは信じた人が義とされるか否かは問われません。その人が滅びることがなく、永遠の命が与えられることが約束されます。

ヨハネ福音書のメッセージとは、世を照らす光として天から来られ、天に帰られるイエスのみが人間を救える唯一の存在であるというメッセージです。そこに神の力が働き、その業が成し遂げられることにおいてのみ人は救われるのだと。そのために人が為すべきことをあれこれと並べたてることはしません。人はただ、葡萄の樹の枝のように神に繋がっていればよいのです。神と人間の生態系はこうして保たれます。さもないと生きた枝としてではなく、焚き付けに使用される薪と化してしまうのです（同書15章）。

御子を信じる者は裁かれない。信じない者はすでに裁かれている。

3章18節にある強烈なメッセージです。始めは信じていなくとも、後から信じるようになるケースでは、手遅れなのではないでしょうか。

裁くのは神です。神がその独り子を賜った時に、もう「すでに裁かれている」者たちの運命はどうなったのでしょうか。神は天地の造り主であると聖書は教えます。神は「すでに裁かれている」者たちの造り主でもあったのです。

聖書によると、その者たちは、自らの悪行を目立たなくするために、闇を好む傾向があったようです。だから光（＝イエス・キリスト）が世に来

ても、光の下には来ようとはしなかったのです。彼らが神の独り子の名を信じなかったことと同じです。そこに、長期にわたって不信仰の時代が存続していたという歴史的事実が語られていたのです。読者は先ず、そのことに気が付くことが求められます。

時が満ちて、神の光が、この世の大勢を占める闇の中へと突き刺さります。「光あれ」と叫ばれた天地創造時の神の御旨が、長い時を隔ててイエス・キリストの出現において再起動しているようです。

しかし、それで終わりなのではありません。聖書を読み、祈りをささげ、神の独り子の名を信じて命に至る道の扉は、今でも人類の住むこの世界の只中に開かれているのです。

わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父（である神）のもとに行くことができない。

（同書 14 章 6 節）